様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5　月　2　日現在

機関番号：15401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：20592625
研究課題名（和文）つどいの広場事業の評価と今後の役割に関する研究

研究課題名（英文）　Research on evolution of community space for mother and children, and future role

研究代表者
川崎　裕美（KAWASAKI　HIROMI）
広島大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号：90280180

研究成果の概要（和文）：
つどいの広場事業の評価指標を探索することを目的に，Nursing Child Assessment Teaching Scale を用いることを試みた。結果，定期的な利用は母子相互作用の母親側の「社会情緒的発達の促進」得点を上昇させることが示唆された。つどいの広場事業の役割として，母子相互作用，特に社会情緒的発達の促進が期待でき，支援者も社会情緒的発達の促進を活動の中で意識することが重要であると考えられた。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study is to find an assessment tool for the community space program for mothers and children. We have tried to achieve the objectives by using the Nursing Child Assessment Teaching Scale. As a result, the score of “promotion of social-emotional development” on mothers within the mother-infant interaction was increased because of the regular use of community space. It suggests that the community space program can play a role in promoting the mother-infant interaction, especially the social emotional development. In addition, it is thought that supporters of the community space program should be aware of the promotion of the social-emotional development in the activity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：看護学
科研費の分科・細目：地域・老年看護学
キーワード：子育て支援，住民活動，発達支援，保護者

１．研究開始当初の背景

つどいの広場事業は次世代育成支援において，「子育て中の親が気軽に集い，うち解けた雰囲気の中で語り合うことで，精神的な安心感をもたらし，問題解決への糸口となる機会を提供すること」という趣旨で設立されている。形態としては，自治体が直接子育て支援センター等で実施する場合と，委託して実施する場合がある。特に，委託して実施する場合，質的な評価を含め委託先を検討する必要があると考える。その際には，具体的な評価の視点，役割や目標を検討する必要がある。今後，保健センターや子育て支援センターとあわせて，一定の効果を得，継続した事業とするならば，より具体的に役割や目標を示す必要があると考える。その一つとして，母子相互の関係づくりによって親子双方の発達を促す機能について着目し，つどいの広場事業の効果を検証するという着想に至った。また，広場事業によって地域住民の連携や母親の相互扶助組織も育ちつつあるが，設置から３年から５年経過し，支援者も具体的な効果が確認できず，意欲低下も認められる。支援者を継続的に確保していくためにも，支援者の満足感の創出は重要な課題であり，具体的な効果を示すことは支援者確保の一助となると考えられる。さらに，今後は行政主導から住民主導の地域活動として展開する必要性が高く，地域住民が長期にわたり継続して事業を行う場合には，人材育成の面からも具体的な評価指標が特に必要であると考える。

２．研究の目的

本研究の目的は，つどいの広場事業における，親子の発達を促す機能について評価を行うこと，支援住民を継続的に確保するための方策の基礎資料を収集することである。つどいの広場を継続利用するなかで，母子が相互の関わり方を学習していると考えられ，母子の変化から，親子の発達を促す機能の評価を行い，子育て支援事業における今後の広場事業の目的・役割の具体化を行う。また，継続的支援者を得るために，長年支援をしている住民の楽しみ，不満についても明らかにし，支援者育成の目標，利用した母子の変化を示した楽しみの仕掛けづくりなど，継続支援者の育成方策を検討する。

３．研究の方法

(1)広場利用母子を対象とした調査

調査期間は2008年9月から2011年7月までの間で，A市で運営される3か所の広場に参加している母子を調査対象とした。対象者に調査の目的･倫理的配慮について説明した後，同意書に署名･捺印をしてもらった。その後，聞き取り面接，母子相互作用の観察を実施すると共に，自記式質問紙調査用紙を配布し後日郵送による提出を依頼する留め置き法を用いた。これらの調査を約6ヶ月毎に3回実施した。調査内容は，母親に関する項目(母親の年齢，出産経験，育児経験，教育年数，就労状況，健康状態，家族形態，広場利用頻度，育児ストレス)と児に関する項目(月齢，出生時体重，在胎週数，発達比，出生順位)，母子相互作用である。育児ストレスは日本版PSI(Parenting Stress Index)を用いた。児の発達は津守･稲毛式乳幼児精神発達質問紙を用い，本研究では年齢相当な発達が1.0になるよう発達年令を生活年齢で除算し「発達比」とした。母子相互作用測定にはNCATS(Nursing Child Assessment Teaching Scale)を用いた。NCATSとは，「養育者/親－子ども相互作用」を観察･測定するための尺度である。米国で標準化され，看護･保健分野等様々な専門職に普及している。わが国でも，2006年に廣瀬らによって信頼性･妥当性が確認され日本語版NCATSが確立した。以後，本研究では「日本語版NCATS」を「NCATS」と記す。0～36か月児までを対象とし，養育者側4つ，子ども側2つの下位尺度で構成されている。養育者側の下位尺度は，「子どもの出すCueに対する感受性」「子どもの不快な状態に対する反応性」「社会情緒的発達の促進」「認知発達の促進」で50項目(50点)あり，子ども側の下位尺度は，「Cueの明瞭性」「養育者に対する反応性」で23項目(23点)ある。Cueとは，児の発する言語的･非言語的なサインを示す。それぞれの下位尺度の中には，養育者と児の随伴性を測定する項目が含まれている。規定の遊びの中から，児が未経験の遊びを選び養育者が児に遊びを教えながら遊ぶ。その様子を撮影し，ライセンスを有する観察者が前述した73項目を判定して73点満点で得点を算出する。得点が高いほど，相互作用が良好であることを示す。

(2)支援者への聴き取り調査

行政から「地域子育て支援拠点事業　ひろば型」の委託をうけNPO法人が運営しているつどいの広場で活動を行っているボランティアに対して研究協力を文書と口頭で依頼し，承諾が得られた10名に平成20年9月から同年10月にかけて，各協力者に1回ずつ半構成的面接を行った。質問内容は，1) ボランティア活動を行っている年数と今まで行ってきたボランティア活動，2) ボランティア活動への参加動機，ボランティア活動から得たことであった。回答は面接中にフィールド・ノートに記録した。協力者全員の面接

が終了した後，協力者の回答全てを前述の質問内容ごとに類似する内容で整理し，カテゴリー化した。この時，個人及びつどいの広場が特定される言葉は省き，スーパーバイザーの助言を得た。

４．研究成果

(1)広場事業における親子の発達を促す機能について

1回目調査時は、第1子より第2子の方が，NCATS の子ども総合得点の下位項目である「養育者に対する反応性」得点と子ども随伴性得点が有意に高い結果が得られたことから，第2子はきょうだいと母親の関わりを見て学び，母親も第1子で慣れていることから得点が高まっている可能性が示唆された。しかし，1～3回目の平均得点では関連が認められなかった。母親の年齢と子ども総合得点においても、1 回目調査時では有意な相関が認められたが、1～3回目の平均得点では認められなかったことから，出産経験やきょうだいの有無，母親の年齢は児の成長に伴い，子ども側の得点への影響が低くなることが推察された。

1回目調査時は、月齢と NCATS 得点に有意な関連は認められなかったが，1～3回目までの平均得点では，月齢と総合得点，下位項目の「認知発達の促進」得点，随伴性総合得点に正の相関が認められたことから，月齢と共に母親は児の表出する Cue に慣れ，児も母親が反応する Cue を学習し，相互に成長し合っていることが示唆された。児の成長発達に伴い，他の様々な要因が NCATS 得点に影響を与えることが考えられる。児の月齢や成長発達も考慮し，その時々の母子の特性に応じて，NCATS 得点の低い母子相互作用の項目を意識して支援することが必要である。

1回目調査時ではつどいの広場を1週間に1回以上利用している群と1週間に1回未満群では，NCATS 得点に有意差は認められなかったが、1～3回目までの平均得点では広場利用頻度が1週間に1回以上群は1週間に1回未満群より「社会情緒的発達の促進」得点が有意に高いという結果が得られた。このことから、広場を利用することで「社会情緒的発達の促進」の要素を母親が学んでいると推察される。「社会情緒的発達の促進」の下位項目には，「養育者は遊び場面の中で少なくとも1回は，児の努力や行動全体を広くほめる」「養育者は児の発声や発語と重なるように声を出したり，話したりしない」など 11 項目がある。広場では支援者が児と直接遊ぶこともあり，その姿を母親が見て「社会情緒的発達の促進」に該当する項目を学習し、得点が得られたと考えられる。他の母子との交流でも同様のことが言える。1 回目調査時では広場利用頻度によって有意な差は認められなかったことから，その効果はすぐに現れるものではなく，月齢が小さい時に広場を利用することで，母親の児への社会情緒的発達を促進するような関わり方が少しずつ上達することが示唆された。早期につどいの広場を定期的に利用することの重要性が示唆され，広場利用をより促進していくことが必要だと考えられる。つどいの広場事業の機能には母子相互作用の中の特に「社会情緒的発達の促進」が存在し，利用者の「社会情緒的発達の促進」得点を検討することでつどいの広場事業の効果を評価できる可能性が示唆された。

(2)支援者の確保のための方策について

支援者は子どもを育てた経験のある者がほとんどであった。誰かの役に立つこと，自分の経験を語ることに満足感を持っていた。支援経験が長いほど，広場事業の責任が増加し負担に感じていた。また，「ボランティア」のイメージが支援者個々に異なること，「仕事」ではないという不安定な立場により，支援者同士の意見調整を困難と感じていることが明らかになった。長期に支援を行う住民は広場事業継続のために重要であり，支援者が負担増のためにやめてしまうことを避ける対策が必要であることが示唆された。支援者確保のためには，行政や専門職が支援者同士の調整を行い、負担軽減を図る必要がある。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 5 件）

1. 森脇智子, 川崎裕美, 山下理子，三国久美，廣瀬たい子他，つどいの広場を利用する母子の成長に伴う NCATS 得点の変化，第 5 回乳幼児保健学会，2011.10，東京.

2. 森脇智子, 川崎裕美, 秀島千晴, 三国久美，廣瀬たい子, 木浪智佳子, 澤田優美, 辻美穂，寺本妙子：つどいの広場に参加する母親に対する JNCAST 利用の試み．第 4 回乳幼児保健学会，2010.10，札幌.

3. 秀島千晴，川崎裕美，森脇智子，三国久美，廣瀬たい子，木浪智佳子，澤田優美，辻美穂，寺本妙子：「つどいの広場」に参加する母親の育児不安とネットワークに関する

検討. 第 4 回乳幼児保健学会, 2010.10, 札幌.

4.秀島千晴,川﨑裕美,森脇智子,辻美穂,玉井崇仁:「つどいの広場」における支援の地域特性に関する検討―参加する母親の実態から―. 第 3 回乳幼児保健学会, 2009.10, 広島.

5.式部美紗代,川﨑裕美,森脇智子,玉井崇仁,秀島千晴,辻美穂:地域での子育て支援を活発に行うために―乳幼児を育てる母親を支援する地域住民へのサポート―. 第3回乳幼児保健学会, 2009.10, 広島.

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
川崎　裕美（KAWASAKI　HIROMI）
広島大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号：90280180

(2)研究分担者
廣瀬　たい子（HIROSE TAIKO）
東京医科歯科大学･保健衛生学研究科･教授
研究者番号：10156713

三国　久美（MIKUNI KUMI）
北海道医療大学･看護福祉学部･教授
研究者番号：50265097

森脇　智子（MORIWAKI　SATOKO）
広島大学･保健学研究科･助教
研究者番号：20512510

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：